

羽村市史編さんだより

令和2年7月

第22号

# 伸びゆくはむら

特集 多摩川がつくり出す風景

今号の内容

News

資料紹介

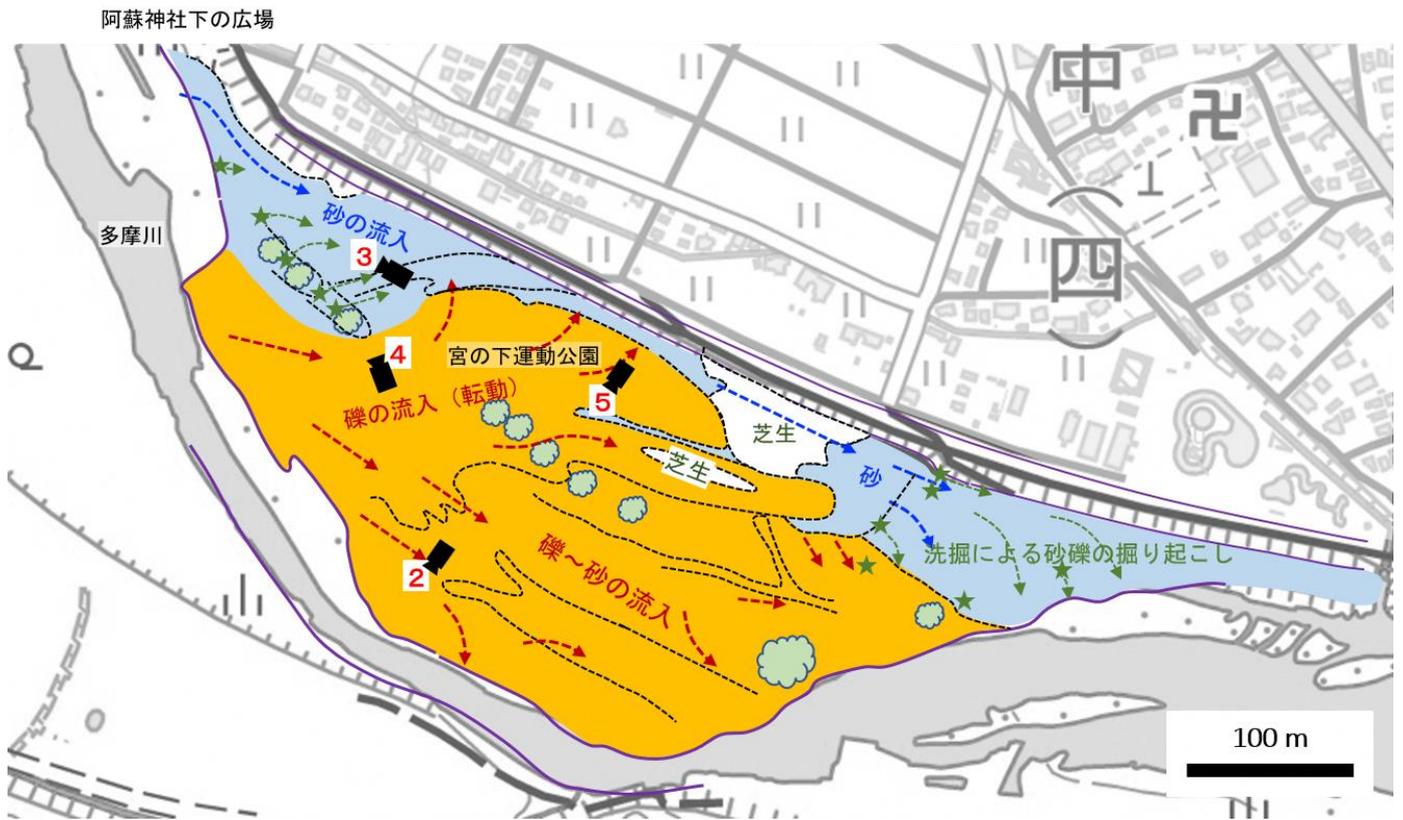
市史編さんの足あと

コラム「ちっとなべえ」

# 特集 多摩川が作り出す風景

羽村市史の自然を担当する第4部会では、市内を流れる多摩川と周辺の自然の変化についても記録しています。

昨年10月、台風19号の影響により増水した多摩川では様々な現象が見られました。今回は、宮の下運動公園で行われた調査の成果を一部紹介します。



▲図1:宮の下運動公園に堆積した砂礫の分布(白井正明氏作図一部加筆)

※番号は写真撮影場所、マークはカメラ撮影方向

## ◆“河川敷(かせんしき)”

みなさんもよく耳にする「河川敷」とは、堤防より川側(堤外地)のグラウンドや丸石が転がっている河原のエリアを指します。河川敷は、常時水が流れている「低水敷」と、洪水時には浸水する「高水敷」とに分けられます。今回の特集の舞台である宮の下運動公園は、この高水敷にあたります。

## ◆台風による大雨

2019年10月12日、大型で強い勢力の台風19号は関東地方を縦断しました。広範囲で記録的な大雨と暴風になり、複数の河川が氾濫しました。羽村市周辺においても1984年以降最大の日降水量(羽村市役所で397mm)を記録し、多摩川も増水、宮の下運動公園は冠水しました(写真1)。平年の10月降水量の2倍を上回る雨が、1日で観測されました。

## ◆植生の変化

河原の植生も大きく変化しました。河原に生えていた水辺を好むハリエンジュなどの樹木や、ススキ、カワラノギクなどの草本が根こそぎ流されたり、砂礫に埋もれたり、強い水流によって倒されたと思われる個体もありました(写真2)。河川敷はこのように、水の力によって風景が一変する場所となっています。

## ◆砂と礫(石ころ)の移動

勢いよく流れる多摩川は、植生だけでなく河原や河床にある礫も動かします。冠水した宮の下運動公園で調べた砂礫の分布から、どのように砂礫が広がったか推定しました(図1)。

### ・水流に乗って流れ込んできた砂

阿蘇神社下の広場側から宮の下運動公園(土手側)へ流れ込んだ細かな砂(写真3)。公園の上流側に厚く堆積していました。

### ・強い水流により転がってきた礫

河原から宮の下運動公園へ広範囲に流れ込んだ礫(写真4)。礫は、転がってきて停止したままの状態に左に傾いており、水は写真左から右へ流れたことを示しています。

### ・宮の下運動公園の南西側に堆積した礫

河原から運び込まれた礫が広範囲に厚く堆積して

います。厚いところでは50 cmを超えます(写真5)。

川がつくり出す風景には様々な形があります。今回の風景は強い水の流れがつくり出しました。このように台風が残した痕跡も貴重なデータになります。後世へ伝える大事な記録として残していきます。



▲写真1:羽村神社より。写真中央、冠水する宮の下運動公園(撮影:宇津川喬子氏)



▲写真3:宮の下運動公園上流側に堆積した砂



▲写真4:宮の下運動公園に流れ込んだ礫



▲写真2:倒されたハリエンジュ



▲写真5:宮の下運動公園に厚く堆積した礫(写真3~5 撮影:白井正明氏)



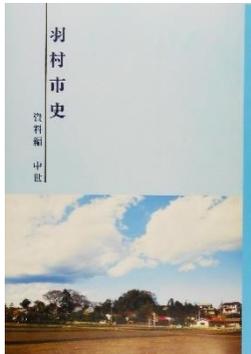
## 表紙の写真

### 冠水したまいまいず井戸

2019年10月の台風19号通過後のまいまいず井戸です。2017年10月の台風通過後に水没したまいまいず井戸の写真は『羽村市史 資料編 自然』にも掲載しています。今回も同じように井戸からは豊富な水が溢れだし、水位はあづまやの屋根に迫るほどです。台風シーズン、大雨の後には普段とは違う雰囲気のまいまいず井戸を見ることができます。(撮影:宇津川喬子氏)

## 資料編、好評発売中です!!

### 『羽村市史 資料編 中世』



A 4判 249 ページ  
価格：2,000 円



羽村では初となる、鎌倉時代から江戸時代初めにかけての古文書を集成した1冊です。

羽村市域を含む「杣保（そまのほ）」一帯を支配していた三田氏などに関する資料や、市内に残されている石造供養塔についても写真や拓本を掲載しています。

### 『羽村市史 資料編 近世』



A 4判 306 ページ  
価格：2,000 円



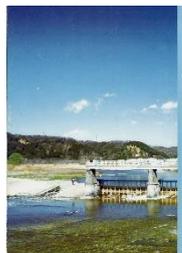
江戸時代から明治時代の初めにかけての古文書や絵図を解説付きで掲載しています。

調査によって新たに発見された史料や、初公開となる史料も収録しており、羽村市域の江戸時代の様子を感じることができる内容となっています。

### 『羽村市史 資料編 近現代図録』



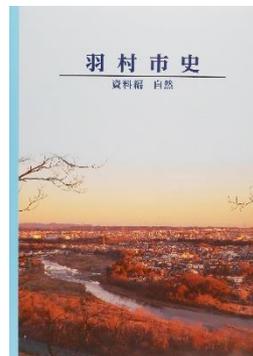
A 4判 327 ページ  
価格：2,000 円



明治時代以降の写真資料をテーマ別に約680点収録し、それぞれの時代を振り返っています。

羽村のまちづくりやくらしの変化、発展に尽力された先人の思いなどを振り返ることができる内容となっています。

### 『羽村市史 資料編 自然』



A 4判 379 ページ  
価格：2,000 円



およそ4年間にわたる調査によって収集された羽村市の自然に関するデータを分析しています。

地図や写真を掲載し、羽村市の地形・地質や気候、動植物について深く知ることができます。

※羽村市役所1階総合案内、郷土博物館にて販売しています。

※資料編は、刊行予定の『羽村市史 本編』の記述の根拠となる資料を掲載するもので、分野ごとに編集して刊行しています。

## 資料編の刊行について

『羽村市史 資料編 考古・中世補遺』及び『羽村市史 資料編 民俗』は、現在、編集作業を進めています。早期に刊行できるよう、鋭意取り組んでいきます。

# 資料紹介

今回紹介する資料は、『羽村市史 資料編 近現代図録』から取りあげました。

「〈2-6-3-4〉夏まつりの夜景 1999（平成11）年」（資料編103ページ）



羽村の夏といえばやっぱり「はむら夏まつり」。日差しが強くなり、気温が上がってくると、まつり会場の熱気あふれる様子を思い出される方も多いのではないのでしょうか。

上の写真は1999年の夏まつりにおける羽村市役所交差点付近の様子です。なるべく街の中心でにぎわいを創出できるようにと、現在とは違って市役所通りを会場としていました。市役所の前から水道道路までの約800メートルを交通規制して、その区間でいろいろな催しものを繰り広げてきました。

2001年からは会場を羽村駅東口周辺に移し、その後は西口でのイベントも拡充させながら今日を迎えています。思い切った会場移転は、駅前エリアの広い範囲を会場とすることでさらなる内容の充実を図り、集客力の向上を目指すことなどが狙いだったといわれています。

また、夏まつりでは二日間にわたって趣向を凝らしたさまざまなイベントが行われています。その中でも多くの観客を魅了するのが土曜日の「人波踊り・万灯行列」と日曜日の「サンバパレード」です。すっかり恒例となった両イベントですが、以前は二日とも人波

踊りだけが行われていました。

羽村独自の振り付けの人波踊りは、市内の町内会が二つのグループに分かれて、土曜日と日曜日を毎年交代で担当していました。しかし、すべての町内会が一堂に会した壮大な人波踊りを見てみたいという市民からの要望に応えるため、1999年に土曜日だけの実施に変更して今に至っています。

一方のサンバパレードですが、始まった当初は「参場踊り」というイベントでした。人波踊りの土曜日開催に伴い、日曜日の新たなイベントを探していた事務局は、羽村版のサンバカーニバルを発案します。浅草サンバカーニバルで活躍しているチームに声をかけるとともに、市民によるサンバチームの結成を呼びかけ、飛び入り参加も含めた「市民が参加できる場」としての「参場踊り」を立ち上げました。これが、現在のサンバパレードの原点というわけです。

多くの市民の力を結集して開催される「はむら夏まつり」。今年は残念ながら中止となってしまいましたが、また来年の夏には羽村を熱く盛り上げてくれることでしょう。

# 市史編さんの足あと

※①～⑤は部会の数字です。(例) ① ⇒ 第1部会

月	日	できごと
4月	3日(金)	④市内調査(宮ノ下運動公園他)
	15日(水)	羽村市史編さんだより第21号発行

## 【お知らせ】

これまで毎号に掲載していた「部会の手帖」は、今後は隔号で掲載していきます。

## 「伸びゆくはむら」バックナンバーについて

以下の場所でご覧いただけます。

- 市史編さん室(市役所西庁舎3階)
- 羽村市図書館(3階地域資料コーナー)

このほか、羽村市公式サイトでもご覧いただけます。

▼公式サイトは  
コチラから



## コラム

# ちっとんべえ

## 第22回「向こうのこっちは、自分側」

「向こう山」。聞き取り調査をしているとたまに耳にする言葉です。「向こう山」がさす場所は、多摩川右岸、あきる野市から青梅市にかけての山の連なりです。普段何気なく聞いていた言葉ですが、資料編民俗編さん作業の中で文章をわかりやすく説明しようと図におこした時、はたして「向こう山」はどこからどこまでをさすのか、小さな疑問がわきました。

結局は、多摩川の向こうにみえる(ある)山だから「向こう山」。多摩川の向こうにみえる山はみんな「向こう山」。話し手によって指し示す範囲に差はあれ、そういうことなのでしょう。

同じような言葉で「線路向こう」「線路こっち」という言葉も耳にします。「線路」は青梅線をさしますが、「向こう」がさすのは話し手の住まいや居場所によって変わります。青梅線西側に住む人が言う「線路向こう」は青梅線東側をさし、東側に住む人が言う「線路向こう」は西側をさします。

自分にとって「向こう」だから「線路向こう」。生活の中だけであれば「向こう」「こっち」で十分用が足りるので、伝わればよし。自分基準の表現であっても問題ありません。

向こうのこっちは、自分側。意識してみると、生活の中にはそんな言葉がたくさんあふれています。



▲羽村市役所屋上より「向こう山」を望む。眼下に青梅線がみえる。(2019年6月13日撮影)

※「ちっとんべえ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。